

『令制の國學について』補正

高橋 俊乘

本誌五月號の拙稿『令制の國學について』に關し次の二點を補正しておきたい。

六四頁十行以下、養老二年按察使の配置は既に五月號に記した通りである。その後多少の變遷の有つた事について書き漏したが、本稿の趣旨に關係が深いから補説する事を許していただきたい。早く養老五年に新しく長門・陸奥に按察使を置き、同時に従來の按察使の管治國も若干變更された。その後も臨時に多少の變更が行はれたことは、天平勝寶四年に橘奈良麻呂が但馬・因幡の按察使に任せられたが、其の管治國が養老三年並に五年の制定と頗る違つてゐるのを見ても推察しうる。しかし平安時代には按察使の名は陸奥・出羽を除いては、殆ど史上に見えなくなつた。

八八頁四行 江次第鈔は江次第(又は江家次第)の誤記である。

彙報

印度宗教學會例會

五月二十八日(水)午後七時より學生集會所乾室に於いて
佛教の教義とその藝術
文學博士 松本文三郎君

美學會

五月二十六日午後六時半より學生集會所南室に於いて
岡頼三氏歸朝歡迎會

哲學茶話會

六日三日(火)午後六時より學生集會所南室に於いて開催す。西田、朝永、田邊三先生の御出席あり。會するもの五十名講演後種々論議あり、盛會なりき。

文學士 高坂正顯君

新著紹介

教育と道徳

西晋一郎著

本書は廣島高師教授西博士の近著であつて、教育に關する論文を序論外十三篇を集めてある。雜誌に載せられた個々獨立の論文を集めたものであるから、順序を立て、集めてはあつたが、教育學全般に對する著者の組織的な見解を伺ひ知ることは出来ない。しかし「教育とは嚴密に言へば道徳教育であることを見せよ」と企てられた著者の目的は十分に達せられたものを見るべく、一切

の教育は常に道徳教育なるべしといふ趣意は、書中のどの篇を見ても濃厚に現れてゐる。殊に序論「道徳教育即教育」及び第三道徳教育(其一)、第四道徳教育(其二)には右の主旨が最も明かに示されてゐる。従つて本書によつて我々の啓蒙されるのはこの點であるが又右の主意を基礎として現代教育を批評し並に現代文明を批評し進んで吾人の取るべき教育の方向を示されし點にも同様に我々が啓蒙される點が頗る多いのである。今著者の主旨を摘要すると、恐らく次のやうになると思はれる。

文化即ち精神的生活の全内容は之を正徳、利用、厚生之三事に約することが出来る。利用は厚生爲であり、利用は道徳爲である。利用厚生を一つにましませたら功利のみで言へようが、功利のみでは到底獨立は出来ない強いて功利のみで押し進むと必ず破滅が来る。衣食足つて禮節を知るさいふも、衣食から禮節が生れるのではない。根本は禮節の俗があるから、衣食足つて禮節を知りうる事もあるものである。しかし道徳生活といふものが、他の生活の外に別在るのではない。衣食、農工、何れも感、敬愛、忠恕等の心を以て行ふのが道徳である。道は近くにあつて遠く在るのではない。されば知識を教養する中にも自ら道徳教育が出来る。教授の外に訓育があるのではない。道徳とは生きたる道である。故に有害さなりやすい欲求をこらへて新しい意味に生きるべきが道徳であると言つても同じことである。これは否定作用であるが、消極的のあきらめではない。欲求を遂げるのが良くない時に之を何らの代償なしに押し除けるのは智術でも慰藉でもなく、赤手天下の戦塵を掃蕩するにも勝る力である。博識は元來よい事であるが、只それだけに止つたらば悪用も出来る。知識の教育は必要であるが、徳育がなければ果樹蔬菜の培養と區別がない。眞の教育は必ず右の否定的關門を通過しなければならぬ。道徳の教育を豫想して始めて人間らしい教育が出来る。創造的開發の教育といふものを外にしては存しない。個性の眞の發揮もこれによつて出来る

と論じて居られる。

又人道的教育と國家的教育との關係については、造化は萬物をして各々その所得せしめ生を遂げしめて休まない。故に人も自他互に相全うするのが眞の人道であり、教育もあらゆる生徒をしてその發育を遂げしめて天地の化育に參すべきである。國家は國際競争のため産業教育を盛んにし生れ附強壯にして智能の勝れた者の教育に骨を折つてゐる。國家存立上やむを得ぬ事ではあるが眞の教育ではない。産業的機械的文明の如き低級文明が高尙なる理想主義の文明の下に統一される時には、人道的教育を施すことが直ちに國家的教育となるであらう。一體賢智を一二もなく奪ぶのは誤つたことで賢智なる者は必ずしも勝れた人ではない。生れ附幸運なのである。國家存立上に足手まといとなる不具遲鈍な者、或は不良邪曲の徒を導いて、それ／＼その生を遂げ忠信質樸に世を送らせるやうにするのが教育の純眞な所であつて、此の點に於いて教育者は宗教家に近いものであると説いておられる。いかに傾聴服膺すべき言説であると思ふ。(高橋俊乘)

東京牛込區矢來町、大村書店發行、四六版二六〇頁、一四八十錢

寄贈書籍雜誌

「量の形而上的研究」抜粹

古谷 榮 一 述

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、日本心理學雜誌、觀想、教育研究、内外教育評論、學校教育、教育時論、藥王樹、三田文學、信濃教育、東亞之光、教育學術會、教育問題研究、東洋思想研究、都市教育、全人、宗教思想、社會學雜誌、講座